

川の向こうに～発祥の地から発信の地へ

川口基督教会牧師 司祭 ステパノ 柳 時京

ソウル教区から大阪教区への出向が決まってから、早くも一年を迎えました。そして、昨年の後半と今年の4月までは、月に2回は川口基督教会へ、他の主日は大阪教区の各教会を訪ねながら、いわゆる見習いの期間を与えられました。その半年間の礼拝出席や信徒の方々との交わりを通して多くの学びや気づきがありました。それらすべての経験は、私にとって4月より川口基督教会の牧師として働く上でとても貴重な糧となっており、大変ありがたい時間でした。

昨年の夏、臨時で過ごしていた桃谷のプール学院宣教師館から出発して、道に迷う不安を抱きつつ初めて川口基督教会に向かった時を思い出します。JR環状線鶴橋～大阪メトロ千日前線阿波座駅経由で参りました。案の定、地下鉄の改札を出て地上に上がって方向を失い、心配通り少し迷ってから教会にたどり着きました。汗ばみで教会に向かう途中、日生病院を過ぎたら、木津川橋が現れました。ちょっとした上り坂の勾配のせいで、近くに行くまでは橋があることに気づきませんでした。橋の南詰に解説付きの記念碑があり、一息つくつもりで立ち留まって解説文を読んでみました。橋の歴史や工法、寸法まで詳しく書いてありましたが、読み終わって私の脳裏に残った言葉は「歩道と車道を分離した日本初の橋である」ということでした。日本初だったのです！

言ってみれば、その日本初の橋を渡ったところにある川口基督教会の地も、また日本初の場所です。ここは日本の開港とともに西洋の国々に開かれた初めての場所で、当時は川口居留地として知られていました。開港当初は先ず商人らが入り、彼らの多くが神戸に移った後は宣教師たちが入ってきて、西洋の文明や技術、そしてキリスト教を伝えた場所であり、近代教育を始めた諸学校や近代的病院などの発祥の地でもありました。今はかつての居留地の面影を伝えるものとしては、川口基督教会が唯一の存在ですが、日本でのキリスト教のもう一つの発祥の地と言えます。つまり、キリスト教宣教の歴史において、関西初の本格的な宣教の地でもあったのです。

このように、川口は当時、多くの日本人にとって「川の向こう」にあった変わった場所でした。今は、もう発祥の地としての役割は十分に果たされ、これ以上川口が何かの発祥の地になることはないと思います。しかし、かつて多くの人々に「川の向こう」という憧れや学びの場所であったことを考えながら、これからは何かの「発信」の地になっていけたらと思います。物の面では、日本はもう先進国になったと言われていますが、精神面、特に信仰の面では必ずしもそうであるとは言えません。むしろ、今の時代に求められる新たな宣教の課題を見出して「発信」することで、改めて「川の向こう」の使命を受け継いでいくべきです。これこそ、川口基督教会が来年の150周年を迎える意義であると思います。